

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00175

研究課題名（和文）画廊「かんらん舎」における展示の美学的・社会的アプローチに関する調査研究

研究課題名（英文）Research study on the aesthetic and social approach to exhibitions in the art gallery Kanransha

研究代表者

岡添 瑠子（Okazoe, Ryuko）

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：50803623

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1980年から1993年にヨーロッパの現代美術を日本で先駆的に紹介した画廊「かんらん舎」の活動が、国内のみならず国際的な美術史の文脈においてどのような意義を持っていたかを検証した。とりわけ「展示空間」が重要性を持つに至った過程を、具体的な事例に基づきながら明らかにした。「空間」は現代美術のインスタレーション作品、特にドイツの戦後美術に共通する主題であり、それらは世界に対する人間の認識を問うものであったことも判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般的に美術画廊は作品の売買の場所として周縁的な存在ともみなされる傾向にあるが、現代美術画廊の足跡を辿った本研究によって、展覧会を通して国境を越えた美術交流を促進し、作家の表現の可能性を広げる場を提供する、という画廊の重要な側面が改めて認識できた。戦後から現代に至る画廊の役割が見直されるなかで、ヨーロッパをはじめとする海外の美術と日本の接点となったかんらん舎の活動を辿る本研究は、美術における国際交流史の観点からも学術的意義があったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the significance of the pioneering activities of the gallery "Kanransha," which introduced European contemporary art to Japan from 1980 to 1993, in the context of art history, not only domestically but also internationally. In particular, I clarified the process by which the "exhibition space" gained importance, referring to specific examples. "Space" is a common theme in installations and contemporary art, especially in German postwar art, and it was also found that they questioned the human perception of the world.

研究分野：美術史

キーワード：現代美術 画廊 展示空間 インスタレーション

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

美術画廊/ギャラリーは、まだ評価の定まっていない若手作家の発掘をはじめとして、美術館に先駆けて新作を発表し、その価値を世に問う場としての役割を持っている。戦後から現代にかけてのヨーロッパの前衛美術を日本で紹介したかんらん舎の足跡から、戦後日本における現代美術受容の様相も見えてくると考えられる。申請者はこれまでに画廊主の大谷芳久氏にインタビューを行なったほか、作家と画廊間の書簡や展示指示書を分析し、展示作品や同時代の日本の美術界におけるかんらん舎の位置付けについて考察してきた。しかし、日本語文献がほとんどない作家もあり、かんらん舎が個々の展示を通して作品のいかなる価値観を伝えようとしていたのか、未だ不明確な部分が多く残っていた。

2. 研究の目的

(1) 当時の日本の美術界においてかんらん舎がどのような位置づけにあり、その活動がどのような意味を持っていたかを考察する。戦後以降の日本での現代美術受容の一端を明らかにする。

(2) 「展示方法」「展示空間」に光を当てて分析する。かんらん舎が紹介した美術動向は、伝統的な美術様式や権威的な美術制度を問い直す動きとして 1960 年代に登場したコンセプチュアル・アートやミニマル・アートの流れを汲むものが中心となった。こうした作品においては技術面よりも内容が重視され、また展示空間における作品と鑑賞者の関係にも関心が向けられていた。どのような意図のもとで作品が制作、展示されたのか、それらはかんらん舎の活動全体にどのような視点をもたらしたかを検証する。

3. 研究の方法

(1) かんらん舎に関する当時の記事などを改めて収集するとともに、日本における現代美術/前衛美術受容については、特に 1970 年代以降に画廊や美術館で開催された現代美術展の実態の把握と、ミニマル・アートやコンセプチュアル・アートを中心とした欧米の前衛美術についての言説分析を行なった。後者については『美術手帖』『芸術新潮』といった美術雑誌内の特集や海外美術情報欄、展評を中心に記事を収集した。

(2) かんらん舎旧蔵の文書資料(作家との書簡やファクシミリ、展示指示書)に基づき、展覧会開催の経緯や実際の展示方法などを分析した。作品の多くは展示空間と有機的に結びついたインスタレーションや作家の指示書によって展示作業がなされるものであったため、特に展示手法とその意味に着目した。かんらん舎における展示空間と作品の関係性を考察するにあたり、1960 年代にヨーゼフ・ボイスの影響を受け、伝統的な絵画形式との葛藤から新しい表現を生み出した 2 人のドイツ出身の美術家、プリンキー・パレルモ(Blinky Palermo, 1943-1977)とイミ・クネーベル(Imi Knoebel, 1940-)の作品を考察した。後者については日本では文献が限られているため、海外の図書館にて作家のアーカイヴ資料を含む文献資料収集を実施した(ルートヴィヒ美術館附属図書館(ケルン)、ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館附属図書館、ベルリン芸術図書館)。

4. 研究成果

(1) 同時代美術の紹介者としての位置付け

本研究を通して、想定以上に多様な雑誌媒体でかんらん舎が言及されていたことが確認された。東京では 80 年代に画廊が増加し、全体的に画廊街が活気を帯びるなかで、かんらん舎は特に現代美術を扱う若手として注目されていた。一般的に現代美術は貸し画廊で発表されることが多いなかで、企画画廊として特異な存在だったことがうかがえる。展覧会も美術雑誌などで少なからず取り上げられていたことは、かんらん舎で紹介された美術自体に関心が寄せられていたことを示している。1980 年のヨーゼフ・ボイス展は、日本でも最も早いボイス展の一つとなったが、大谷氏が現代美術の世界に飛び込んだばかりだったにも関わらず大きな評判となった。知られざる作家を世に問う、という姿勢は、そもそもは開廊からまもなく連続して開催された「早逝の画家達」の特集から一貫していた。つまり、作家たちの哲学をまず自らが知りたいという気持ちから出発していたのである。

貸し画廊が主流であった日本で、出品作家の交渉から企画までを主体的に行なったこと、一貫して 60-70 年代のコンセプチュアル・アートの系譜にある同時代の前衛美術の紹介に努めたことは、改めて注目に値する。70 年代までの際立った展覧会を除いて、日本の鑑賞者が絵画や彫刻にとどまらない新たな美術に直接触れる機会は限られていたからである。一方でかんらん舎は、一大美術潮流として日本でも大きな注目を集めたニューペインティングは敢えて取り上げず、あくまでも画廊と作家の個人間で成り立つ個人画廊であるからこそ、未だ知られていなかった動向の紹介に注力した。大谷氏が 1982 年に訪れた国際芸術祭について記述した当時の文章によれば、作品は作家の「自己表現」というよりは思考のプロセスの手段や結果であると感じた

いう。対して、近代以降の日本では海外の美術を移入することにとどまってきたとし、画廊として、同時代の作家たちが「現在、何を考えているか」を伝えることを目指す、と述べていた。これが「とにかく『同時性』を大事にしてヨーロッパとのギャップをなくしこの場で制作し発信する」という方針につながっていく。

(2) プリンキー・パレルモ作品からの考察

かんらん舎の特徴として、展示空間における作品の配置が考慮され、空間全体に静謐さや緊張感をもたらされた点が挙げられる。これは一つには、かんらん舎が導入した、画廊での滞在制作の影響があった。床を削り取って作品に用いる、展示室に合わせてサイズが変わる作品など、自己と周囲との関係性を問い直し、小さな空間で見せるという作家たちの実験的な表現方法は、滞在制作というあり方と密接に結びついていたのである。しかし普通の展覧会でも、作品という「モノ」よりもその内容、つまり「コト」を見せることに主眼が置かれていた。本研究ではかんらん舎における「空間」を歴史的な文脈から捉えるために、パレルモの作品を通して考察した。パレルモは物故作家であったが、かんらん舎の現代美術画廊としての最後の展覧会（1993年）を飾った作家であり、60年代後半から発表された「壁画」は、本来作品を架ける壁そのものを色で覆うラディカルな試みだった。「壁画」に影響を与えたとしてしばしば指摘されるボイスの《脂肪の部屋》は、天井と床の隅に脂肪の塊で三角形を形作るように塗り込めた作品で、鑑賞者の空間への意識に訴えかける意図があった。これに比べると、パレルモの作品は身の回りの色や形を用いてささやかに空間に働きかけるものであった。かんらん舎の最終展示では、ステンシルを使って部屋の扉の真上に描く、という指示に基づく作品、《青い三角形》一点のみが展示された。単純な形と色はかえって連想の余地を与え、作品という「モノ」の裏側に隠れている「コト」へと鑑賞者の意識を向かわせる、かんらん舎の展覧会を象徴するような展示であった。パレルモの「壁画」については、2021年8月に「ボイス+パレルモ展」開催に際してオンライン上で催されたシンポジウムにて報告を行なった。

(3) イミ・クネーベル作品と展示空間

かんらん舎が日本で紹介した作品について考察を深めるために、研究期間の後半ではイミ・クネーベルの作品研究に着手した。クネーベルに注目したのは、新作を中心とした個展を定期的開催していたことに加え、展示空間の構成に特徴があるからだ。特に1984年のかんらん舎での初個展は注目に値する。ベニヤ板に描かれた《観想》(Betrachtung)という4枚の連作は、作家の展示プランによれば、展示室に斜め向きの壁を新たに立て、会期を4回に分けてそこに作品を1点ずつ展示することが想定されていた。壁や作品を斜め向きに置く方法はクネーベルの他の展示にもみられるため、展示室に絵画1点のみという展示方法は異例である。しかしこの展示方法には、まるで映画のスクリーンにも似た鑑賞体験をもたらす意図があったと考えられる。さらに、鑑賞者と作品を囲む展示室の白い壁は、クネーベル作品の特徴をなす「部分と全体」「無限と断片」のモチーフとの関連から考えることができる。例えば1975年の作品《25万枚のドロワーイング》は、無数のドロワーイングが鍵のかかったキャビネットに収められて展示され、制作の時間と無限の拡がりが見えられた。翻って《観想》では、鑑賞者に作品への集中と没入を促す一方、作品自体の剥き出しのベニヤ板や激しい筆跡はむしろ没入を妨げ、鑑賞者を囲む白い壁は作品の断片性を強調する。この展示方法は、見えるものと見えないものへの繋がりを示唆する、一つの空間を構成するものであった。さらにこの「見えないもの」という特徴は、初期から近年まで展開を遂げながらみられることが明らかになった。

クネーベルに関する研究の成果は、2022年6月に早稲田表象・メディア論学会にて発表し、さらに発展させた上で論文にまとめた。2023年度も引き続きクネーベル作品と空間との関係性についての考察を進めた。1980年代以降は、東西ドイツの分断といった同時代的、歴史的な文脈を喚起する作品も登場するようになった。そのなかでは初期作品における「Raum」(空間、部屋)というモチーフが、より幅広い意味を持つようになった。したがってかんらん舎で展示された作品に関しても、同時代の社会的な側面からの分析が重要だと考えられる。特に湾岸戦争勃発一年後の個展で展示された連作《黒い絵画》も、日本で展示されたことの意味も含めた考察が必要だろう。こうしたテーマについて、海外での文献資料収集を実施し、分析を進めている。引き続き今後の課題としたい。

(4) 作家への聞き取り

最終年度の2023年度末には、かんらん舎で唯一の日本出身作家であった寺内曜子氏にインタビューを行なった。イギリスで活動していた寺内氏にとって、かんらん舎での個展が日本での本格的なデビューとなった。寺内の作品は内と外、表と裏といった既存の二元的な考え方への疑問から生じており、例えばイギリス時代に手がけたインスタレーションは展示室の外側が部分的に見え、内と外の関係性を再考させるものだった。かんらん舎での初個展では、その考え方を展開させた《空中楼阁》(1991年)を滞在制作にて発表した。このインスタレーションは画廊の空間のある世界の一部と捉え、通常見えていると思われるものへの認識に揺さぶりをかけるものだった。画廊の運営については、展覧会後の現状復帰の費用も画廊が出し、作家の希望を優先した上で、作品にも責任を持つ(例えば展覧会ごとに必ず作品を1点購入する)という姿勢は画廊のなかでも特異であり、作家たちから信頼を得ていたという。結論として、このような体制・

環境だったからこそ、作家たちは新境地を開くことができたといえる。改めて作家側の視点を知ることができたこのインタビューは、本研究にとって大変意義深いものであった。今後も展示に関わった関係者の証言を得ることによって、さらに多角的な視点から考察することが不可欠である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岡添瑠子	4. 巻 13
2. 論文標題 イミ・クネーベル作品における「見えないもの」と「見ること」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 表象・メディア研究	6. 最初と最後の頁 17, 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡添瑠子
2. 発表標題 イミ・クネーベルの作品にみる空間へのアプローチ
3. 学会等名 早稲田 表象・メディア論学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・「パレルモの「新しさ」について」『国立国際美術館ニュース』第242号、2021年、5頁 ・口頭発表：「Blinky Palermoの壁画について」「ボイスとパレルモ 二焦点の座談 二焦点の座談」ART TRACE PRESS 企画シンポジウム、2021年8月22日 ・項目執筆：「パレルモ年譜・主要文献」『ボイス+パレルモ BEUYS+PALERMO』（展覧会図録）、マイブックサービス、2021年、332-345、352-354頁 ・展覧会レビュー：「ミニマル/コンセプチュアルを解きほぐすために」（「ミニマル/コンセプチュアル：ドロテ&コンラート・フィッシャーと1960&#8211;70年代美術」展）、ウェブマガジン『アートイット』2022年6月18日（https://www.art-it.asia/top/admin_ed_exrev/225169/）
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------